

# 存在と時間

## — 哲学的射程 —

河 野 一 典

### 序 問題の背景

ではいったい時間とは何でしょうか。誰も私に尋ねないとき、私は知っています。たずねられて説明しようと思うと、知らないのです。

(アウグスティヌス『告白』第11巻第14章17節 山田晶訳)<sup>(1)</sup>

アウグスティヌス<sup>(2)</sup>の有名な時間論の書き出しである。われわれにとって時間は余りにも身近な存在であり生活そのものである。休暇中は時間をまるで贅沢な資源のように、何に費やそうかと思案し楽しんでみたり、仕事の締切りが迫ったときは、時間に追い立てられ、まさに忌まわしいものとなったりする。時間はわれわれにとって現実を成り立たせる当たり前の基盤であり規準である。それを改めて意識し問う必要はない。

それではアウグスティヌスは時間の何を問うたのであろうか。西洋古

(1) *Confessiones* (以下 *Conf.*), XI, 14, 17. *quid est ergo tempus? si nemo ex me quaerat, scio; si quaerenti explicare velim, nescio.* 訳文は、アウグスティヌス『告白』(世界の名著16 中央公論社) 山田晶訳になるべく従う。

(2) Aulelius Augustinus (A.D.354~430年) 北アフリカのタガステ(現在、アルジェリアのスーク・アハラス)に生まれた。若い頃から弁論術の勉強をし、370年からカルタゴで弁論術を学ぶ。キリスト教に回心する前は、19才の時キケロの『ホルテンシウス』を読み哲学に関心をもち、一時期(373~382年) 善悪二元論のマニ教を信奉していたが、その後懐疑論を経て新プラトン主義の哲学と出会い、マニ教から離れる。383年ローマ帝国の首都ローマに行き、更に384年にはミラノで弁論術の教師をするうち、ミラノの司教アンブロジウスおよび母モニカの影響によって、洗礼を受けキリスト教徒となった。388年よりタガステで息子、友人たちとともに修道院のような生活を始める。391年、北アフリカの都市ヒッポ(カルタゴに次ぐ第2の都市)の司祭に、396年には司教に選出された。430年、北アフリカに侵入したゲルマン人の一族ヴァンダル人によってヒッポが包囲される中、この世を去った。

代・中世哲学史において何が問題であったのだろうか。その一つは世界の成り立ち（創成）の問題であった。すなわち世界はずっと存在してきたし、これからもうずっと存在するもの（世界永遠説）なのか、それとも世界にははじまりがあり、また終わりがある（キリスト教創造論）のかという二つの対照的な思想が存立していたのである。前者の典型は古代ギリシア哲学の世界観であり、後者はキリスト教創造論に基づく世界観である。アウグスティヌスがマニ教から離脱しキリスト教に回心する際に決定的な契機となったものが古代ギリシアの新プラトン主義哲学である。その影響を受けたアウグスティヌスが彼の時間論を展開するとき、新プラトン主義哲学（特にプロティノス）の概念を援用しながらも、それとは異質のキリスト教創造論に基づく世界観を思弁的に確立していくのである。しかしながらその過程は容易ではない。対立する二つの思想をいかにして融合させることができたのか。両者の相克の一端を明らかにすることが本論の目的である。

## I 時間論の契機

アウグスティヌスが『告白』第11巻で着手したことは旧約聖書『創世記』（*Genesis*）第1章1節冒頭の「はじめに神は天地を造り給うた（In principio, fecit Deus caelum et terram.）」<sup>(3)</sup>の解釈である。その聖句に対する「神は天地創造以前、何をしていたのか」というマニ教徒による一連の『創世記』の記述に対する誹謗に答えることが、彼の時間論の発端となっている。『創世記』冒頭に関するマニ教徒の問いは以下の3点にまとめることができる<sup>(4)</sup>。

- (1) 天地を造る以前、神は何をしていたのか。
- (2) もし神が天地を造る以前何もしていなかったならば、なぜ神は以前何もしていなかったように、引き続き何もせずにいられなかったのか。というのは神において新しい動きが生じ、かつてけっして造らなかった被造物を造ろうという新たな意志が生じたのなら

(3) 『創世記』のテキストはアウグスティヌスを使用した版に従う。アウグスティヌスのテキストの校訂は以下の書に従う。Bibliothèque Augustinienne, Œuvres de Saint Augustin, 13, 14, 48, 49, 50. (Desclée de Brouwer)

(4) *Conf.* XI, 10, 12.

ば、神の意志は神の本質 (substantia) に属しているがゆえに、神の本質は真に永遠 (aeterna) であるとは言えないからである。

(3)もし被造物が存在するように欲する神の意志 (voluntas) が永遠 (sempiterna) であるならば、その永遠の神の意志によって造られた被造物は、なぜ永遠ではないのか。

(1)は神が被造物を造る以前を問題にし、神が何もしていなかった場合(2)神の永遠性に異議を唱えている。さらに(3)では、神の永遠性が認められるとしても、被造物もなぜ永遠ではないのかという別の考えを示唆している。したがってマニ教徒の問いの背景には、先述の世界永遠説が浮上してくる。

アウグスティヌスはまず端的に次のように反駁している。神は全能であり、万物を造り、万物を保持し、天地の製作者である。マニ教徒の問いは神が天地を造る以前、数えきれない世紀にわたり御業をせずにいたことをいぶかっている。すなわちその問いは神が天地を造る以前、神が無為のまま時間が過ぎ去ったかのように考えている。しかしそのことは万物の創造主である神の規定に反する。「天地」のもとに全ての時間が含まれていると理解されなければならない。時間もまた被造物である。したがって神が時間を造る以前、時間は過ぎ去ることもなく、存在することもない。時間は天地とともに存在し始めたのである。結局、神は被造物(時間)を造る原因として、時間以前に存在しなければならないが、時間以前の神において時間は過ぎ去ることはない。神は時間を越えた存在である。したがって「天地を造る以前」と問うことは、その問い自体が無意味なのである。

また、(2)は被造物を造ろうという神の意志の原因についても問うていると考えられる。しかし神の意志に先行する神よりも偉大な何らかのものがあることを仮定することは誤りである。神の意志はすべてのものの第一の原因そのものであるから<sup>(5)</sup>。

それでは最後に(3)にみられる世界の永遠説は斥けられるであろうか。

(5) 世界永遠説を唱える古代ギリシアの哲学者アリストテレスは、運動変化するこの自然的世界のものは動かされて動いているものとする。しかしながら、第1の原因として、自ら動かされることはなく動かす「不動の動者」の存在が必要であり、それを神と呼んだ。アリストテレスは、自然的世界をある意味で超越した存在を扱う形而上学を成立させた。その意味でアリストテレスにおいても第1原因は時間的に継起する自然界を超えた存在であると言える。

ジルソン<sup>(6)</sup>の説明を参考にすると、世界永遠説は次のような主張となる。ずっと昔から足がほこりの中に置かれている。足跡もずっと昔からほこりの上にあるだろう。したがって原因（足・創造主）は結果（足跡・被造物）に時間的に先んじてもないし、結果が原因の後にあるわけでもない。しかし足は明らかに足跡の原因である。したがって神は常に存在し、常に世界を創造してきた。創造は存在の秩序においてははじまりを持つが、時間の秩序においてははじまりを持たない。世界は永遠である。

以上のマニ教徒による問いを契機に、アウグスティヌスの時間論は展開する。そこには『創世記』解釈をとおしてキリスト教創造論を思弁的に構築するという目的と、彼が学んだ古代ギリシア哲学の世界観（世界永遠説）とが相克し、両者を融和させる困難な過程を露にしながら複雑な議論が進む。問題の所在は時間と対立する永遠をいかに理解するかである。

彼にとって永遠の被造物という考え方は受け入れがたいものであった。過去において世界が常に存在し、時間が常に存在してきたとしても、そのことから世界が永遠であることは帰結しない。なぜなら絶え間なく続く時間が永遠ではないからである<sup>(7)</sup>。すなわち単に瞬間的な存在を有するのが時間の本質である。時間は客観的に見れば、現在のみがあると言えるのであって、過去はもはやないし未来はまだない。その現在も瞬く間に過ぎて過去となってしまうのであるから、きわめて不確かな存在である。神の永遠にして常に同一に留まる存在と比して、時間は常に変わりゆく不完全な存在である。

他方、永遠なる創造主が時間に先立つのは時間において時間に先立つのではない。さもないと時間を持続の中ではいかなる時点においても常に「それ以前」があるから、すべての時間に先立つことは出来ない。

(6) E. Gison, *The Christian Philosophy of Saint Augustine*, tr. By L.E.M.Lynch pp. 192-193, p.340 note 6 参照。霊的知性的被造物（天使）は常に存在した（非時間的）し、時間を生み出す（先行する）とすることができるが、被造物である限り神と等しく永遠であるとは言わない。『神の国』*De Civitate Dei*, XII, 15, 16. キリスト教思想における天使という古代ギリシア哲学にない存在者は両者の存在論の決定的な差異であると考えられる。

(7) 中世後期たとえばトマス・アクィナスに到ると、天使に帰される永続（sempiternitas）と神に帰される永遠（aeternitas）の概念的区別は明確になる。アウグスティヌスもマニ教徒の問いの中で二つの表現が見られるが、両者を意識的に使い分けているかどうかは明言できない。

それゆえ神が時間に先立つのは常に現在である永遠の高さによって先立つのである。それによって神はすべての過去の時間に先立ち、同時にいずれ過去となる未来の時間を追い越している。われわれにおいて、時間はやって来ては行き過ぎる可変的なもの、すなわち非存在から存在へそしてまた非存在へと移行するものである。それに対して神は常に同一のものとして在り、そこにおいてはやって来たり行き過ぎたりすることはない。

このようにアウグスティヌスは永遠と時間の存在の仕方を峻別し、永遠と時間についてキリスト教創造論の立場から新たな概念を提示している。言い換えればキリスト教創造論の中では、永遠と時間との区別は神と被造物に帰される異質な存在の仕方の区別としていわば垂直的に断絶しており、ギリシア哲学が有していた世界観すなわち時間が無始無終の円還運動の輪のなかにあるいわば接触的な永遠・時間概念<sup>(8)</sup>を変容させて理解していることが看取されるのである。

## Ⅱ 創造と時間

アウグスティヌスは、創世記冒頭の「はじめに (in principio)」の解釈として最終的に<sup>(9)</sup>、(1)「時間のはじめ」の意味、(2)「第一に」という非時間的な創造の秩序の意味、(3)「御言イエス・キリストとしての始原において」という意味、の三つの解釈を提示している。

(1)の解釈の場合、引き続き「天地 (caelum et terram)」は可知的であれ物体的であれ全被造物を意味する。先述のマニ教徒の問いは、神が

(8) プロティノスにおいては、時間は永遠のうちに安息していた魂が自ら動き出すことによって生じた。魂が永遠に模して感覚世界を作り、自己を時間化するとともに世界全体を時間の中にあらしめ、隷属させた。時間は魂のうちに見え、魂のうちにあり、魂とともにある。すなわち時間を直知界の永遠なる生命と結びつけて、その生命の分裂が時間をもたらしたとする。すなわち時間とは、魂のある生活から別の生活へ移行する動きにおける生命である。(Plotinus, *Enneades*, III, 7, 11.) 他方、時間は永遠を獲得することによって、永遠(安息)のうちにあらうと欲し、延びていく生の長さ、活動の連続性を持つ。それが活動を停止し永遠へ向き直ることによって時間は永遠にして「一」のうちでとどまるのである。魂・時間は永遠にじかに触れており、永遠にあづかっている。(Ibid. III, 7, 7.)

(9) アウグスティヌスの一連の『創世記』注解書は以下の通りである。  
『マニ教徒を論駁する創世記注解』*De Genesi contra Manichaeos* (388-390年).  
『未完の創世記逐語注解』*De Genesi ad litteram, liber imperfectus* (393-394年).  
『告白』*Confessiones* XI-XIII (397-c.400年).  
『創世記逐語注解』*De Genesi ad litteram* (401年-).

天地を造る以前、数え切れない世紀にわたり創造をしないでいたことに疑問を持っている、すなわち天地創造以前、神が無為のまま時間が過ぎ去ったかのように言われているが、われわれは「天地」の下に全ての時間が含まれていると理解しなければならない。なぜなら時間もまた被造物だからである。従って神が時間を造る以前、時間は過ぎ去ることはなく、存在することもない。時間は被造物とともに始まったのであるから、天地を造る以前と問うことは、その問い自体が無意味である。

(2)の解釈の場合、「天地」は「無形質料」を意味する。「第一に」とは非時間的な創造の順序を意味し、その順序においては後述のごとく質料が形相に先行するからである。すなわち全知全能たる神は全被造物を無から創造したが、無から無形質料は造られ、その無形質料が形相づけられて全てのものが造られたのである<sup>(10)</sup>。

さて(3)「御言イエス・キリストとしての始原において」と解釈する立場がアウグスティヌスの真骨頂である。その解釈は『ヨハネ福音書』第8章25節を典拠にしている。

彼ら（ユダヤ人達）はイエスに言った、「あなたは誰か。」イエスは彼らに言った、「始原（principium）である、というのは私は君たちに語りもするから。」<sup>(11)</sup>

神の言・御言は神の意志・理念（ratio）を表している。しかも御言は音声のように時間的な被造物の動きではない。もし時間的な仕方て神が語り、天地を造ったとすれば、天地の存在以前に既に物的被造物が存在していたことになるからである。御言は音声ではなく神と等しく永遠の御言である。御言は神の思惟内容としての永遠の理念（aeterna

(10)「神は世界を無形質料から造った」（『知書』第11章18節）この言葉は既に『マニ教徒を論駁する創世記注解』以来、彼の『創世記』注解においていわば大前提として、深く刻み込まれているものである。De Gen. cont. Man. I, 5, 9., 6, 10.

(11) De Genesi contra Manichaeos, II, 3.

His respondemus Deum in principio fecisse caelum et terram, non in principio temporis, sed in Christo, cum Verbum esset apud Patrem, per quod facta et in quo facta sunt omnia. Dominus enim noster Iesus Christus, cum eum Iudaei quis esset interrogassent, respondit: Principium, quod et loquor vobis.

De Genesi ad litteram, liber imperfectus, III, 6, 2.

Secundum Historiam autem quaeritur quid sit in principio, id est utrum in principio temporis an in Principio, in ipsa sapientia Dei, quia et ipse Dei filius principium se dixit, quando ei dictum est: Tu quis es? et dixit: Principium, quod et loquor vobis.

ratio)とも言われる。それ故全ての被造物は、存在し始めるべきであるとか、存在することを止めるべきであると、全知全能たる神の永遠の理念において知られるまさにその時、存在し始めたり存在することを止めたりするのである<sup>(12)</sup>。

また、御言がイエス・キリストを通して耳に聞かれる仕方で語られ、われわれが聖書においてそれを読むことが出来ることをアウグスティヌスは意義深く考えている。始原とは、われわれがそこから存在するところの存在の拠り所であり、われわれが迷うとき、存在の拠り所に立ち返るように、われわれに教えてくれるものであると言われているからである。

このように(3)「御言イエス・キリストである始原において」とアウグスティヌスが解釈する場合、始原は世界の神の理念、ある意味で範型(イデア)としての側面と、創造主と被造物とを関係付け仲保する救世主としての側面を合わせ持っている。言い換えれば神と被造物との在り方の絶対的な断絶を関係付けるものとして、キリスト者アウグスティヌスはイエス・キリストを見出し、それを彼の世界観の中に定位しているのである。したがって古代ギリシア哲学において純粋に知性認識の対象であった神は、キリスト教思想における神認識にとっては、知性認識のみならず神からの語り・働きかけ(啓示としての聖書・恩寵)と、それに呼応することもまた不可欠のものとして問題になるのである。

### Ⅲ 存在と時間

このようにアウグスティヌスの時間論は、時間的世界の存立をまさに根源(principium)から理解する試みである。彼の世界観は存在者の在り方について階層的な構造をとる。端的に言えば、1永遠なる神(父・子・聖霊という三位一体の神)、2霊的知性的被造物(天使)、3魂(知

(12) *Conf.* XI, 8, 10.

... nisi quia omne, quod esse incipit et esse desinit, tunc esse incipit et tunc desinit, quando debuisse incipere uel desinere in aeterna ratione cognoscitur, ubi nec incipit aliquid nec desinit.

*Ibid.* XI, 8, 10.

et ideo principium, quia, nisi maneret, cum erraremus, non esset quo rediremus, cum autem redimus ab errore, cognoscendo utique redimus; ut autem cognoscamus, docet nos, quia principium est et loquitur nobis.



性的魂・可感的魂)、4 物体的被造物である。人間は魂と身体からなる存在である。不変的な知性認識能力を有するが、身体を通して時間的感覚的存在でもある。

『告白』第11～13巻で提示した『創世記』冒頭の解釈は、その後『創世記逐語注解』に引き継がれ、そこでアウグスティヌスは独創的な解釈を鮮明にしている。『創世記』第1章1～5節における彼の解釈を端的にまとめると次のようになる。

1. はじめに神は天地を造った

In principio fecit Deus caelum et terram.

2. 地は見られず整わず Terra erat invisibilis et incomposita,  
闇が深淵を覆っていた et tenebrae erant super abyssum.  
神の霊が水の面を漂っていた

Et Spiritus Dei superferebatur super aquam.

3. そして神は言った、光成れ Et dixit Deus, Fiat lux;

そして光が生じた et facta est lux.

4. 神は光が善いことをみた Vidit Deus lucem quia bona est;

そして光と闇を分けた et divisit Deus inter lucem et tenebras.

5. そして神は光を日、闇を夜と呼んだ

Et vocabit Deus lucem diem et tenebras noctem,

そして夕べが生じ朝が生じた

et facta est vespera et factum est mane

一日である dies unus.

(ラテン語原典はアウグスティヌスを使用した版による。)

〔『創世記逐語注解』における解釈〕

Deus: 父 principium: 御言イエス・キリスト Spiritus Dei: 聖霊  
caelum, terra, tenebrae, abyssum aqua: 無形質料

lux: 霊的被造物の形成 dixit: 御言による形相づけ

vespera: 霊的被造物の下方への認識

mane: 霊的被造物の御言への帰還

「光成れ」(1,3) とは、霊的被造物が無形の状態から、形相づけら



れ創造主へ向き直ったことを意味する。

最初の一日の「夕べ」(1,5) が来て、霊的被造物が自らの固有の本性を自己認識する。続く「朝」においては霊的被造物が創造主へ帰還し観照することを意味する。

また、二日目の「大空成れ…そしてそのようになった」とは霊的被造物が御言(永遠の理念)において大空を認識することである。再び「夕べ」において霊的被造物が大空を、その本性そのものにおいて認識する。また「朝」が来て霊的被造物がその認識を創造主へ帰還させるが、それは引き続き三日目の「水」の認識を受け取るためである。このような日の認識が六度繰り返される。

したがって「天地」等は物体的であれ霊的であれ、被造物の不完全な質料性が意味され、『創世記』冒頭のいわゆる創造の6日間は霊的知性的被造物の思惟において無時間的に生じたものであり、全被造物が階層的に己の上位の被造物を通して、創造主に向き直ることによって形相づけられ完成するという創造論的世界観を説明している。われわれが目の当たりになっている時間的な生成もまたこのような根源的な創造・形成のもとに継起するのである。

### Ⅲ 存在の秩序と時間の秩序

アウグスティヌスは『告白』第12巻第29章40節において、「先行する(praecedere)」<sup>(13)</sup>の意味を四つに区別している。

四つの「先行する」とは、(1)永遠において先行する(2)時間において先行する(3)選びにおいて先行する(4)起原において先行する、の四つである。そして最初と最後の二つを理解することが難しいという。まさに神の創造の業を理解する観点だからである。

(1)と(2)の先行する秩序に関して言えば、神の創造の6日間の業を『創世記』の記述の順序に従って、時間的な出来事の継起ととることは、た

(13) アウグスティヌスは「先行する」という概念を、原因が結果に先行するという存在論的な概念を意味することに加えて、『創世記』の記述の順序を整合的に理解するための根拠として使用している。

ちまち不可解な矛盾をきたし、先述のマニ教徒による誹謗の対象となった<sup>(14)</sup>。アウグスティヌス自身も自問する形で、聖書の記述の順序と事実とは整合的であるかを試行錯誤しながら論述を進める様子は、一連の『創世記』注解テキストに如実に現れている。

(3)「選びにおいて先行する」秩序は、実が花に先立つ場合である。すなわち目的因（時間的には後になる）が価値の上で優れていることを意味する。アウグスティヌスが『創世記』冒頭において、第一の被造物として霊的被造物の創造を読み込むことに傾斜し、ひいては Deus は父なる神、principium は御言・イエスキリスト、Spiritus Dei には聖霊を読みとるという独創的な解釈の正当性の根拠として機能していると思われる。なぜならそれらは物的被造物よりも、価値の上ですぐれているから先に記述されることは自然であるとアウグスティヌスは理解しているからである。

(4)「起原において先行する」秩序は音が歌に先立つ場合である。そこに見出されるのは制作者の側からみた、制作・形成の秩序である。すなわち神の創造の場合、質料は形相づけられたものに時間的に先立つのではない。神は全被造物を同時に永遠の仕方でも創造したからである。聖書において語られる際には、あたかも時間的に先立つかのように語られているが、質料と形相は、非時間的・論理的な創造の順序として用いられているのである。

したがってアウグスティヌスにおいては質料には二つの側面が見出される。第一に『告白』第12巻で詳しく論じられているように、質料は形相が推移する元にある基体（受け皿）として、世界の存在者の複合・合成という内在的な在り方を説明する一方の原理である<sup>(15)</sup>。それはアウグスティヌスがかつとも影響を受けたプロティノスはもとより、アリストテレス、ストア派の哲学者も含めて古代ギリシア哲学の共通の理解である。他方「質料が形相に先行する」という仕方でも、『創世記』の記述の整合的な解釈のために「質料」が用いられているとき、アウグスティヌスは神という制作者を明確に指定した創造の秩序を念頭に置いて用いて

(14) *De Genesi contra Manichaeos*, 3, 5. 「もし地が見られず整わなかったならば、いかにして天地を神は造ったか」、*Ibid.* 3, 6. 「神は光を造る以前闇の中にいたのか」等々。

(15) *Conf.* XII, 5, 5., 6, 6., 8, 8. etc.

いるのである。従ってアウグスティヌスにとって質料とは、プロティノス哲学に見られるような事物の内在的な可変性の根拠であるとともに、神によって無から造られたという、事物の被造性そのものを明示する概念として用いられていると考えられる。ここでも先述の永遠・時間概念同様に、古代ギリシア哲学の伝統的な質料・形相概念の意味を変容させて用いているのである。

#### Ⅳ おわりに

われわれにとってあまりにも現実的な時間の所在を、アウグスティヌスもまたプロティノスにならい、魂の中に見出す。フッサール (Edmund Husserl, 1859-1938) が『内的時間意識の現象学 (*Zur Phänomologie des inneren Zeitbewusstseins*)』で取り上げて以来、ハイデガー (Martin Heidegger, 1889-1976) にも影響を与えた時間論の部分は以下のとおりである。

三つの時間が存在する。過去のもの (praeterita) に関する現在 (praesens)、現在のもの (praesentia) に関する現在 (praesens)、未来のもの (futura) に関する現在 (praesens) である。これら三つのものは魂の中にあり、過去のものに関しては記憶 (memoria)、現在のものに関しては直視 (attentio)、未来のものに関しては期待 (expectatio) がいずれも現在として存在する。そして時間とは延長であり、精神そのものの延長 (distentio) であると結論する<sup>(16)</sup>。しかもこの精神の働きは、一人の人間の生涯にわたり、人々の全ての生涯を含む全世紀において行われるとして、世界のはじまりから終わりに到る時間にまで拡大されている。

さらにこの精神の働きは生の分散 (distentio) として人間の生の悪しき在り方を示すものとなり、永遠不変の存在への向き直りを促すことに

(16) *Conf.* XI, 28, 37. Sed quomodo minuitur aut consumitur futurum, quod nondum est, aut quomodo crescit praeteritum, quod iam non est, nisi quia in animo, qui illud agit, tria sunt? nam et expectat et adtendit et meminit, ut id quod expectat per id quod adtendit transeat in id quod meminerit, quis igitur negat future nondum esse? sed tamen iam est in animo expectation futurorum. Et quis negat praeterita iam non esse? sed tamen adhuc est in animo memoria praeteritorum, et quis negat praesens tempus career spatio, quia in puncto praeterit? sed tamen perdurat attentio, per quam pergat abesse quod aderit.

なるのである。すなわち永遠なる存在としての「一」なる神と被造物としてのわれわれを仲介するものとしてのイエス・キリストを通して、「多」なるわれわれが神を尋ね捉えるために、時間的なものに分散されるのではなく、眼前にある（ante esse）ものへ、分散（distentio）ではなく集中（intentio）によって超出（extendere）されるべきことをアウグスティヌスは説くのである<sup>(17)</sup>。いわゆる永遠への道行きとしての現在に意味が与えられている。

アウグスティヌスはキリスト教創造論に基づく新しい世界観を構築するために、自身が学んできた異質の古代ギリシア哲学の概念を使用せざるを得なかったが、時間的世界の基にある不変的世界・超越的存在者の新たな形而上学的基礎を提示した。近代自然科学の成立以来、科学的・時間的因果関係に馴染んだわれわれにとって、永遠（非時間的）・不変の存在者や根原的・目的論的秩序で物事をみることは困難であるかもしれない。本稿ではあえてアウグスティヌスの時間的存在者としての人間の魂の時間論を固有に問題にしなかった。今後プロティノスをはじめギリシア哲学の魂論、時間論ひいては人間論を比較検証することによって、そこでもギリシア哲学とキリスト教思想を繋ぐ連続性と異質性を確認しながら現代に生きるわれわれを省みる契機としたい。今後の課題として別の機会に論及するものである。

（鹿児島純心女子短期大学教授）

---

(17) *Ibid.* XI, 29,39.